・人文系学問に対する批判・圧力（文系不要論）が顕著になっている現状について、一介の若手研究者も危機感を覚えている。
・しかし、かかる文系不要論に対し、７月３１日のシンポ・そして今回のシンポ等の機会が設けられ、反論が出されていることには、大変勇気づけられている。
・あらためて考えてみれば、実学重視が叫ばれているが「人はパンのみにて生くるに非ず」。魯迅は実学を求めて医術の門を叩いたが、文学に活路を見出した、という例も然り。
・自分自身、「不要」と言われる人文系の道になぜ進んだのか、と改めて考えてみれば……物心がついてから様々な疑問・悩み等に直面した時、最も支えになったのは、幸福な読書体験を始めとする、学問・芸術に触れた経験だった。そうした経験をもっと深めるために、大学という場にやってきて、人文学を学び始めたのだった。
・かように自分の原点を問い直すような機会を、今回のシンポで頂いた。やはり、人文学は無用とは思わない。香川先生の「もう粛々と適応するだけの態度はやめよう」という示唆、氣多先生のおっしゃった「たとえどんな片隅においやられても、『居残り』続けなければならない」という言葉が心に響いた。

岡田文弘（東京大学大学院人文社会系研究科インド哲学仏教学研究室博士課程）